

## ニシン曇りはどこへ？

かつて、北海道の春の気配は「ニシン曇り」から始まった。雪はまだたっぷり残っているのに、どこか生ま暖かくどんよりと曇っている日など、立ち話で、

「ニシン曇りだね」

「そろそろ春が来るね」

翌日の新聞は、どこかの浜で大量のニシンがとれたというニュースが必ず載った。ニシンは正に春告魚だった。

札幌に近い銭函や石狩にニシンがあがると馬車が山積みして街なかを売り歩いた。今スーパーで買うような一匹二匹などではなく、平たい魚箱（ひと箱に数十匹は入っていたらう）を一軒の家で十箱二十箱とまとめ買いするのが、習わしになっていた。

その大量のニシンを一家総出で、ウロコを取り内臓を裂き、白子と数の子を分け、身はスノコ状に縄でくくって軒に下げて身欠きを作るなどと、大量の作業をするのだった。

春のニシン干しと秋の大根干しは、札幌の家庭にとって季節の二大行事と言って良かった。今、秋の大根干しは街なかを注意深く見ていると、ほんの少しの家でわずかに見ることもできるけれど、春のニシン干しは札幌市内の家庭の軒下ではまず見ることがなくなってしまった。それは戦後しばらくして、ニシンの回遊がほとんどなくなって、かつてエゾの米とまで言われたニシンが幻のように姿を消して、いわば高級魚の仲間入りかと思うほどの魚になったからだ。それに加えていえば、冷凍技術をはじめ魚の保存技術と運搬手段が、ここ数十年の間に飛躍的に進化して、何も近所でする春のニシンと秋の大根ばかりを当てにする食生活の必要がなくなってしまったせいでもある。

ともあれ、ニシン曇りという季語は死語になってしまって、ほとんどの人に忘れられ、まして、春の大量のニシン干しなどという、季節の行事など嘘じゃないと思う人が大多数になってしまった。浜からニシンが消え街から風物詩が消えて、何十年かになる。札幌の街にはもう郷愁は似合わないのかもしれない。